

かゑらじと かねて思へハ 梓弓
なき数に入る 名をぞとどむる
四條畷に散った若き武将、楠正行

楠正行通信 第98号

令和1年11月12日

発行＝四條畷楠正行の会

〒575-0021 四條畷市南野5丁目2番16号

四條畷市立教育文化センター内 072-878-0020

延元元年、常陸国瓜連城で佐竹と戦った楠正家

素鷲神社の蔵から、楠正家郷武者像発見される

正家、正平3年1月の四條畷の戦いで戦死

● 四條畷市史に載るも謎の人物 ●

10月例会のテーマは、「楠正家と楠正行」を取り上げた。

楠正家に関しては、ほとんど史料が残っていない。四條畷市史には、四條畷神社合祀者の中に楠左近将監正家・同子息と記されているのみで、その戦いぶりや事跡には全く触れておらず、その人物像を窺い知ることはできない。

日本史人名辞典の楠正家位の項には、「正成の一族にして左近衛将監に任ぜらるる。延元元年、常陸に赴き、瓜連池に城築き、大いに北朝の兵を破る。後、北畠顕家に随いて下り、正行とともに四條畷に戦死す。」とある。

ここに記された「常陸に赴き」の件は、楠正家は正成の一族の一人で、河内の武将であるとの認識に立つものと思えるが、その後瓜連で戦ったこと以外、何も触れていない。

● 正行像に酷似する武者姿 ●

今年の夏、茨城県那珂市瓜連の素鷲神社の蔵から木箱に入った楠正家郷の武者像が出てきたとの情報が飛び込んできた。素鷲神社の西尾則史宮司が、正家ゆかりの四條畷神社や関係者に見てほしいとのことで、お会いすることとなった。

遠く、茨城県からお見えになった西尾宮司ご夫妻とは四條畷神社でお会いした。もちろん現物は持ちだせず、持参されたのは写真のみであったが、天地25センチほどの木箱の扉の裏書に、筆で「楠正家郷」と記されている。

武者像は高さ17センチほどの陶器製の立像で、右手に筆か鏃のようなものを持ち、両足をそろえて立ち、身体は正面を向き、顔はやや左を向く姿である。

そして、武者像の底（足の裏の台座部分の裏）には、紙が張り付けられており、朱色で菊水の家紋が押印され、その下に黒色で『四條畷神社』と押印されている。

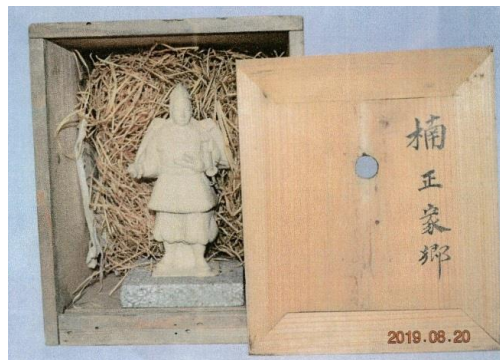
素鷲神社は、楠正家との直接の縁はないものの、楠正家が築いたとされる瓜連城の敷地内に建っているとのこと。

四條畷神社の押印と菊水の家紋の押印からして、四條畷神社創建後に何らかの関わりでこの紙が張り付けられたことは明らかであるので、どのようないきさつで素鷲神社に納められたものか不明ではあるが、いずれにしても四條畷神社が創建された明治23年以後

のことであることは間違いない。

そして、この武者像は飯盛山山頂の楠正行像に酷似しており、また非常に若い姿から判断して、正行の武者像を素鷲神社の関係者が瓜連に持ち帰り、瓜連に縁の深い「正家郷」と箱書きしたものではないか、というのが扇谷の見解である。

この武者像については、現在、素鷲神社が専門家に



鑑定を依頼しておられ、近いうちにその実態が分かるのではないかと思われる。

素鷲神社の西野宮司とお出会いし、書状のやり取りの中で、参考にと「瓜連町史」のコピーを送っていただいた。町史の第三節「南北朝期の瓜連」の一、「瓜連合戦と楠木正家」に楠正家に関する件が載っている。

■楠正家、延元元年、常陸に来る

建武三年正月、足利尊氏に従っていた佐竹義篤・義春兄弟は、常陸を固めるようにとの尊氏の命を受けて常陸に兵を返した。この月、元号は延元と改められた。

楠左近蔵人正家が、楠正成の代官として常陸に現れるのも、ほぼこの延元元年正月～二月ごろとみられている。正家は拠点を瓜連に定め、これより佐竹の軍勢と戦うことになる。これが世に云われる瓜連合戦（瓜連城の戦い）である。

瓜連城は、天神林の馬坂城から約4.5キロ、佐竹の本拠地である舞鶴城から8キロ、久慈川の対岸に位置する。この、いわば目と鼻の先に、菊水の旗は掲げられたのである。佐竹は常陸での活動に自由を得るためには、この瓜連を攻略しなければならなかった。

佐竹の最初の攻撃は、延元元年2月のはじめの事で、2月6日の戦で佐竹貞義の子、六郎義冬が討死している。この時、当主の義篤は西国にあったので、義篤の父、貞義が総大将であったが、子息義冬討死という事はかなり激戦が展開されたと思われる。

正家が常陸に入ったのは何時であったか、必ずしも明確ではない。延元元年の時点で新たに派遣されてきたのか、古くから常陸の瓜連近辺に勢力を持った土豪勢力であったのか、何れとも判断できる史料がないのである。

■正家、楠木在庁説・土着勢力説も

石岡の総社神社に伝わる文書中、弘安8年正月29日付の留守所下分に、国司代左近大夫将監橋朝臣の署名が見えることに注目し、この人物を正成の父、正康ではないかと考え、常陸の在庁に楠木の一族があることが、正家常陸派遣の理由であろうと推測する、江戸時代末期の水戸学者、中山信名の楠木在庁説、そして、常福寺・慶長7年の寺領帳・奥書に「慶長七〇極月十日 御修理手代、楠木綾部〇〇（花押）」とあることに注目し、瓜連落城266年の後ではあるが、この地に楠木を名乗る一族があることは、楠木氏と瓜連との因縁浅からぬことを思わせると、平泉澄博士はこの史料によって、正家土着勢力説に傾いている、と記す。

■瓜連に正家が在ったことは確実

しかし、楠判官正成代官正家を中心に、この地の人々が結束して、少なくとも2月から12月21日の落城に至るまで、勇戦敢闘したことだけは事実である。

「関城釋史」は、延元元年正月、常陸に入った正家が那珂通辰一族の協力を得て西金砂山に佐竹貞義を攻めた旨「戸村本佐竹系図」によって記している。

そして、「薬王院文書」に、以下一通の着到状がある。

着到 常陸国

右、佐竹幸乙丸代云、入野七郎次郎〇〇〇助房、自今年

去建武三二月廿五日至乎今、馳籠常〇〇（陸国）久慈郡瓜連左近蔵人（楠木）正家之楯、及合戦之〇〇〇遅参仕候也 仍着到如件

この着到状は、佐竹幸乙丸の被官と思われる入野七郎次郎という武将の差し出したもので、2月25日から久慈郡瓜連左近蔵人正家の“楯”になって合戦をしていたので遅くなりましたと記している。着到の日付は5月4日となっているから一カ月余り瓜連に居たことになり、官軍に味方する佐竹の一族を含む在地の諸勢力が、正家の下に結集した姿を伺うことができる。

この着到状があるが故、瓜連の地に正家が在ったことが証明されるのである。

この年、3月から5月にかけて、常陸の官軍は各地に戦い戦果を挙げたと思われる。しかし、東征を開始した尊氏は、5月正成を、6月名和を討ち、7月に入ると東国での巻き返しに本腰を入れ始め、伊賀盛光など奥州勢の援軍を得た佐竹勢は、再び瓜連に迫る。

戦いは8月22日に始まり、激戦の末、佐竹勢は敗退した。

しかし、12月2日、武生城を出立した佐竹勢は、三度瓜連に向かい、同10日、岩出河原で激戦の末、翌11日、遂に瓜連は落城した。

■北畠顕家に随い、奥州を経て河内に戻ったか

水戸藩の編纂した「大日本史」は、「今川記」や『太平記』によって、瓜連を脱出した正家は、奥州に移り、鎮守府將軍であった北畠顕家の軍に加わり、のち、楠正行とともに四條畷で討死した、と記している。

いずれにしてもはっきりしたことは言えないが、落城後は奥州に赴き、顕家の軍と行動を共にしたとする従来の生存説に従っておこう、と結んでいる。

● 正家の河内土豪説を補完する武者像 ●

正家常陸土着説をとれば、楠氏に連なる一族がなぜ常陸に勢力を張っていたのか疑問は残る。また、正家河内土豪説をとれば、遠く瓜連の地で足利方強豪の佐竹と1年にわたって抗戦しうる軍事力をもちえたのかとの疑問は残る。

しかし、瓜連町史が触れているように、瓜連の地が北条氏の直轄領（得宗領）として北条貞国に与えられ、貞国が瓜連城を築き、後、鎌倉幕府を倒した後醍醐天皇が元弘収公地としてこの地を正成に配し、その代官として正家が送り込まれたとすれば、正家は貞国と一致して強敵、佐竹勢と対抗し得たため1年近くにわたって持ちこたえることができたと解することができる。

瓜連の素鷲神社・蔵から発見された「楠正家郷」武者像が、明治期、瓜連の関係者が正行の武者像を持ち帰り、同地ゆかりの楠正家郷と筆書きしたものとすれば、瓜連に土着としての正家の痕跡が残っていなかった証左とも云え、正家河内土豪説を補完するものといえるのではないかと。

那珂市広報誌9月号「瓜連城と常福寺」は、この正家郷の写真を掲載し、「今後、この像についての情報が寄せられることを期待したいところです。」と結んでいる。

（文責『四條畷楠正行の会』代表 扇谷昭）